



〈自分（たち）でつくるみんなの学校～日本一美しい学校を目指して～〉

成美っ子

学校だより 令和3年度No.3



宿命・運命・使命

校長 佐野 正人

本校のランチルームには、道吉 勝重先生作、150号の日本画の大作「潮騒」（日本美術院展覧会〈院展〉入選作）が飾られています。厳しい冬の日本海の風景であろうか、白く激しい波が岩礁に打ち寄せ、自分のところまで迫り来る海の絵です。先生は、海や山、大樹等を題材に多くの作品を残され、時には外国の風景にも果敢に挑戦しておられました。

そんな道吉先生との出会いは、私が新採で赴任した志貴野中学校です。同じ職場で、そして同じ美術科の大先輩として、指導者として、教師なりたての私に、教材研究の大切さや生徒指導の要等について、常に優しく教えていただきました。

先生自身のお話を聞く機会も多く、先生は、教職の道に進まれた時から制作活動に励まれ、所属する団体に作品を出品しておられました。東京芸術大学での内地留学を機会に、院展の道に進んだとお聞きしました。教員を続けながら、38年間作家としても活躍され、退職後もその制作意欲は衰えず、20年以上続けられたのです。

そんなある時、先生から「君も日本画を描くのならば、院展に出品してみないか」と誘っていただいたのです。「しかし、続けるには相当の覚悟もいるぞ」とも言われました。自分としてはどれだけやれるだろうかと不安がありましたが、やってみようという気持ちが強くなり、院展に挑戦することとなりました。それからというもの、先生のスケッチに同行させていただいたり、自宅を訪問させていただいたりするようになりました。制作時期になると、私の下絵や作品についてご指導いただくこともありました。先生の制作風景を拝見することも多くありました。絵を少しでも良くしようと、出品期限ぎりぎりまで描いておられる姿等、生き方としてもたくさんのお話を学ばせていただきました。また、先生からは「まず作家になる前に、一人前の先生になること。本業の教師としての仕事に手を抜かないこと」とご指導いただきました。

私はというと、院展を志してから20年間、落選の日々が続きました。しかし、部活動の大会等で時間をとられた時や、受験や卒業を控えた3年生の担任として忙しい時でも、歯を食いしばって制作は続けました。制作活動を始めてから30年以上が過ぎましたが、まだまだ作品に取りかかる姿勢が甘いなど反省しています。しかし、絵が描けなくなるまで頑張ってみようと思います。

その人（人たち）と出会うことは避けられない「宿命」、その出会った人（人たち）とどう付き合っていくかで決まるのが「運命」と言いますが、道吉先生との出会いは、私にとって、人生を大きく左右する運命だったなと感じています。

4月、学校には新たな出会いが待っています。最初の職員会議で、「皆さんとの出会いが、自分の運命となるよう一緒に働きたい。先生方には、この子との出会いが、自分の人生を豊にさせてくれる運命と感じ取ることを期待したい」と話しました。出会いから3か月が過ぎようとしています。出会った人との関係はどう変わったのでしょうか？

また、私たちにとっての「使命」は「子供たちにとって必要なものは何かを常に考え、それらをどのようにして身に付けさせてあげられるかではないか」と伝えました。私たちは、子供にどんな力を身に付けさせてあげることができたか、1学期の評価とともに考えてみたいと思います。

最後に、子供たちにも「使命」はあります。「はじめに学習に取り組み、人に優しく接すること、何事にも興味をもち挑戦すること」ではないでしょうか。



